

環 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	5
瑠璃集	10
瑪瑙集	18
紅玉集	21
光耀抄月評	22
恵贈句集散見 (1)	25
総合誌の窓 (4)	27
恵贈俳誌散見 (2)	29
琥珀集作品鑑賞	31
瑠璃集作品鑑賞 I	32
II	33
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	34
梅のひとり言	36
趣味三昧	37
山科毘沙門堂吟行	39

今月の一句

白地着て血のみを潔く子に遺す

能村登四郎

明治四十四年に東京都に生まれ、平成十三年没。昭和十四年「馬酔木」に入会。二十六年に第一回、翌二十七年と連続新樹賞を受賞し確固たる足場を築き、個に執っていた目を社会にもむけるようになる。

晩年になれば誰しも考えることであるが、中七の措辞が殊に胸を打つ。作者の生きざまが「白地」と「血のみを潔く」に言い尽くされている。「子に遺す家訓とてなし梅白く 隆子」の句があるが心境は同じであろう。

大^{たい}山^{ざん}ゆらぐ

塩路隆子

梅雨冷やペン拊胝うづく嵩の稿
祖母の名のをんな大学曝しけり
恋行方草矢飛ばして占へる
年齢は忘れましたと更衣
光年といふ涼しさの夜空かな
「大金持」割らず呑みたり諸焼酎
山法師揺れて大山ゆらぎけり
柘榴咲き露人ワシコフ笑まひけり

八月号光耀抄

塩路 隆子選

雨霽れて鴉色の月ほととぎす
草笛やコイン精米待つ間にも
父の日のポケットに「パパ有難う」
雪形の種まき爺さん種を蒔く
紫雲英咲く田園都市を快速車
盤座の神へ献杯新樹光
交番はいつも留守がち蠅たたき
立ち尽す寂光浄土草蚩
小児科へ思はぬ慰問夏の蝶
梅雨兆す骨董店の蜻蛉玉
花楓佳人の髪に触れて散る
水替への緋鯉の真紅峡の村
舟唄の英語バージョン五月雨るる
諸焼酌酌めば火の国訛り出で

杉本 綾
竹内 悦子
藤見佳楠子
増田 一代
中川すみ子
伊藤 憲子
宮崎左智子
小澤 菜美
宮田 香
塩路 五郎
田中 芳夫
杉野原弘幸
小林 成子
鈴木 照子

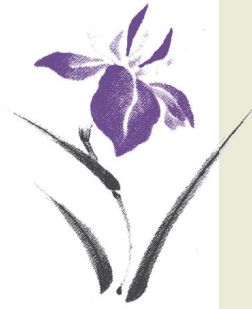
自衛艦のサイトのレシビ鯉どき
 黙々と笹鮒釣りや青葉風
 神苑の風と遊べり花菖蒲
 葉ざくらのや磴の高きに勅使門
 衝立に夢の太文字あやめどき
 漸くに抱卵気配燕の巢
 名刹の山門遠し青葉蔭
 登山宿魁夷ブルーに目覚めけり
 子等遊ぶ廃線跡や草いきれ
 ふくろうの金の眼動く五月闇
 院展に逢いし貴婦人夏帽子
 こでまりに思い出あまた数え唄
 五月雨るる里の懸樋や水ぐるま
 突風に翻りいるキャンプ村
 梅雨茸や人の噂は二段跳び
 華甲過ぐなほはんなりと藍浴衣
 代掻きはむかし牛馬や父母恋し
 悲しみの色閉ぢ込めて青き薔薇
 入梅や古きパソコン貰い受け

田下 宮子
 坂上 香菜
 前川ユキ子
 岡 佳代子
 吉田 晴子
 駒井 のぶ
 笠井 清佑
 井口 淳子
 三川美代子
 久保田美智子
 松田とよ子
 池田加寿子
 高谷 栄一
 坂根 宏子
 伊東 和子
 森永 洋子
 山口キミコ
 和田森早苗
 鷺見多依子

蜘蛛の巢の破れて正義とは何ぞ
 見上げれば二枚プロペラ楓の実
 パパママもお子様ランチ子供の日
 人恋ひの唄口遊ぶ梅雨籠り
 胸に住む夫と語らふ星涼し
 雨雫きらとどめし蜘蛛の糸
 黒南風にそよぎしきりの葦生かな
 樹上より狙ふ鷺の眼鮎の川
 雨垂れの不協和音や走り梅雨
 鉄線のもつれ咲きせる夜の青き
 梅雨雲を神の一吹き比良晴るる
 流儀なく活けるが極意花菖蒲
 野仏のみ手より垂るる蜘蛛の糸
 夏蜜柑の覗く山里垣低き
 二人目は女の子だよ聖五月
 新しきたたみの匂い柿若葉
 なす山につゆ雲たちが先に着く
 くりの花クリーム色のふさたれて
 ひるごはんれいめん食べてちゆるちゆる

常田 創
 難波 篤直
 新実 貞子
 森下 康子
 能勢 栄子
 安本 恵子
 宇治 重郎
 紀川 和子
 笹井 康夫
 佐用 圭子
 藤本 秀機
 山本 千里
 稲田 和子
 山本 孝夫
 片岡やす子
 松田 洋子
 高野 綸
 廣瀬 結麻
 中森 圭那

琥珀集



草笛

竹内悦子

草笛やコイン精米待つ間にも
魚籠満たす鮎の釣果や疏水べり
麦秋の空の明るさ若狭道
毎日が日曜なりし時計草
蛇苺多聞天への分れ道
強引に鯖勧められ若狭かな
疎まれてなほしたたかに花十葉

鴝色の月

杉本

綾

燕来る隣家の軒を眩しめり
塩を振る夕餉用意の桜鯛
蹲に鳥の水浴びみどりさす
老鶯やもつたいなくも独り住み
新茶汲む亡夫と香りを頷ちつつ
雨霽れて鴝色の月ほととぎす
久々のフランス料理若葉窓

パパ有難う

藤見佳楠子

今更のマンション暮し新茶汲み
何も彼もオートロックや青葉冷
高階の目覚め明るし夏燕
汗だくや一番乗りの古ピアノ（移転）
去る家に残すすずらん肥をさばに
父の日のポケットに「パパ有難う」
テールライト少し滲みて走り梅雨

風薫る

増田 一代

満地球

伊藤 憲子

雪形の種まき爺さん種を蒔く

風薫る道案内の道祖神

更けし夜の光淡しや梅雨の星

黄に染まるれんげつつじの離れ里

お手植の木に桜の実山ホテル

桐の花夕の帷に凜と咲く

雨上る明日は訪ねむ水芭蕉

紫雲英咲く

中川すみ子

蠅たゝき

宮崎左智子

紫雲英咲く田園都市を快速車

梅雨じめり六枚きりの畳拭く

梅雨しとど電話いづこも話し中

鈍色に動かぬ巨船五月雨るる

し判の写真の駄作額の花

店頭に飾る松笠カフエ涼し

軽トラに稚児乗せ団地祭かな

美しき滴り青し満地球(かぐやの映像より)

盤座いむくらの神へ献杯新樹光

三弦にひたりて茶の湯沙羅の花

身を反らし桴ばち打つをとこ夏越の儀

花菖蒲丈それぞれに麗しき

ほととぎす打てど応へぬ右脳かな

更衣捨て切れずまた手を通す

豆飯のグリーンの真珠光りけり

棟梁の派手なバンダナ夏ひばり

万緑の山もこもことブロッコリー

交番はいつも留守がち蠅たゝき

露の世に消ゆるも愛し孕猫

鈍色に五山連峰梅雨深む

鼻唄に煎薬煮つめ梅雨厨

草 蚩

梅雨月や多き災禍にただ祈り
目高棲む青き地球のどこしなへ
立ち尽す寂光浄土草蚩

蚩火の流れの行方追ひにけり
里を守り蚩貴し子の貴し
酒蔵の塀に添ひたる夜涼風
櫓を捌く鳩の浮巢をついと避け^よ

飛 鳥

青芝の大地に聴けり子守唄
水無月の夜雨のリズム鼓動かな
万葉の地の育くめる母かな
主のぬぬ高松塚へ著莪の雨
玄武らの幻影抱き黴の宿
遠蛙記憶に響く夜更けかな
小児科へ思はぬ慰問夏の蝶

小澤 菜美

蜻蛉玉

俳人の眼もて追ひけり黒揚羽
梅雨兆す骨董店の蜻蛉玉
父の日や古きアルバム丹念に
志功絵を玄関に掛け涼しかり
来世には鳥になりたし万緑裡
饒舌のリズム鈍らすかき水
ヘルパーの汗遅しく美しく

宮田 香

双 魚

花楓佳人の髪に触れて散る
老鶯の確かに彼處樹々の中
襖絵の動くと見たり風薫る
風薫りつつ襖絵を歪めたる
刃の字つく義士の墓碑銘菖蒲とき
日々草疏水べり行く楽しさに
小鮎釣る底に二尺の双魚ぬて

塩路 五郎

田中 芳夫

瑠璃集

青嵐

青嵐鳶はひらりと身をかはし
離農して早苗田徑をなつかしむ
玉葱の収穫日和我が家また
漸くに抱卵気配燕の巢
早朝の早口言葉ほととぎす

仔鹿

名刹の山門遠し青葉蔭
赤膚の茶碗温しや額の花
若葉光総身に浴びて人を待つ
青葉蔭暝りしままの和上像
生れて直ぐ乳探りある仔鹿かな

駒井のぶ

笠井清佑

登山宿

登山宿魁夷ブルーに目覚めけり
超音波にてのエステや朱夏ひと日
豌豆挽ぐや憩へる時は湖眺め
川面すべるエイトの声や新樹光
木椅子にてポプラの風や夏の蝶

井口淳子

草いきれ

子等遊ぶ廃線跡や草いきれ
夕風に鳴る群生の小判草
追伸に「もう啼いてます」遠蛙
ジャズで聴くモーツアルトや柿若葉
安曇野は植田ばかりや道祖神

三川美代子

五月闇

跳ね鯉の身を打つ響き夏に入る
おしくらの亀の浮石ひつじ草
六月の象の孤独よ長睫
ふくろうの金の眼動く五月闇
十葉の白の暗さを愛しむ

久保田美智子

光耀抄七月月評

塩路 隆子

雨霽れて鶉色の月ほととぎす

杉本 綾

中七の「鶉色の月」の措辞に惹かれた。鶉は朱鷺と同じ、コウノトリ目トキ科の鳥である。全体白色であるが、風切羽と尾羽の基部に淡い紅色のあるところから、淡紅色を鶉色という。「ほととぎす」とあるから恐らく梅雨のころであろう。雨上がりの「鶉色の月」を作者は見ている。折りしもほととぎすが啼き渡っているというシャッターチャンスがいい句、色があり音があり動きがあり、しかも幽玄を感じさせる句として高く評価したい。

草笛やコイン精米待つ間にも

竹内 悦子

最近は玄米をストックしておいて必要な分だけを白米にして使っている家が多くなったようである。我が家もコイン精米機をよく使用している。10キロが1000円、見る見るうち白米に、選択によって五分搗き、七分搗き

が可能である。暖かさの残るお米を持ち帰るのだが、矢張り搗きたてのお米は美味しい。作者もコイン精米機を愛用されているようである。精米を待つほんの短い間にも草笛を吹いているのは作者であろう。また草笛を始めたばかりのお子様のことを、ご自分のこととして詠んでおられるのかもしれない。「待つ間にも」とあるから片時も離さず草笛を吹いておられる姿が浮かぶ。楽しい句に出逢った。

父の日のポケットに「パパ有難う」

藤見佳楠子

何故か母の日は五月の第二日曜で、父の日は六月の第三日曜と定められている。日頃の感謝を改めて見直すために設けられた日であろうが、面と向かつて感謝を述べると、日本人は苦手のようなのである。作者もそのようである。

お嬢様さまのご家族とお住まいの作者であるから「パパ」は娘婿に当たられる方であろう。ポケットにそっと「パパ有難う」のお手紙を忍ばされたと言う何と床しい心遣いではないだろうか。作者のさりげない行き届いた心遣いの句である。

